

沖縄戦 60年

当時の状況を
いまの情報、視点で構成

沖縄戦新聞

第10号 1945年(昭和20年)5月27日 日曜日

沖縄戦新聞は新聞の体裁を取り、日付は本来なら第32軍が首里放棄を決定し、喜屋武方面に撤退を開始した翌日の5月28日とすべきですが、当日を再現するために27日付としました。また、紙面には27日前後の関連する出来事も併せて掲載しました。

32軍、首里司令部を放棄

摩文仁へ撤退

組織的戦闘力を失う

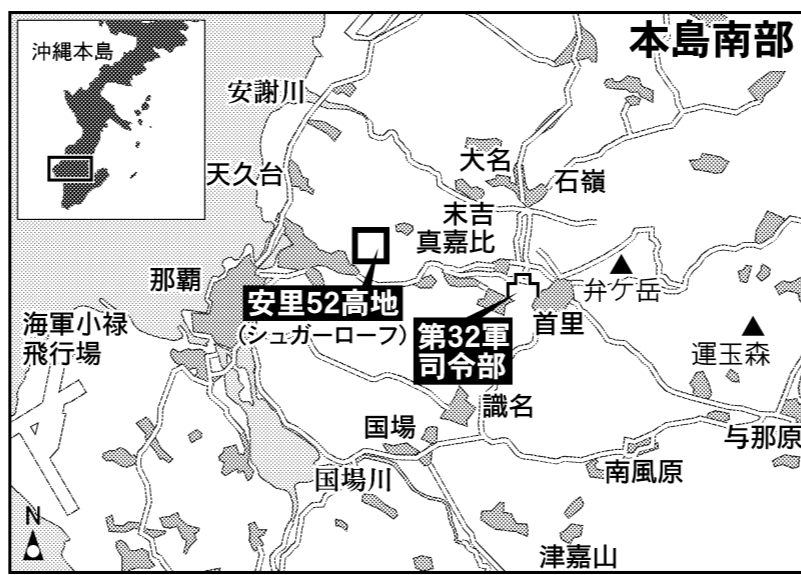
避難民、巻き添え必至

沖縄守備軍の第三軍(半島満司令官)は司令部のある首里を防衛する最後の拠点・運玉森を米軍に占領され、二十七日夜司令部を放棄して本島南部の喜屋武方面へ撤退を開始した。新たな司令部は摩文仁に置く。第一線部隊は二十九日から撤退する。本土決戦の準備が整うまで沖縄に一日でも長く米軍を引き付ける戦略持久戦を展開する方針しかし、多くの傷病兵を抱え、武器・弾薬も底をつき組織的戦闘力を失っているとみられる。島田敬知事は「南下した住民がじかに戦火に巻き込まれる」と主張し、首里放棄に反対したが受け入れられなかった。日本軍が撤退する本島南部地域に避難している十万人以上の住民が戦闘に巻き込まれることは避けられない。



第1海兵師団の激しい攻撃を受けた首里の日本軍兵舎(1945年5月29日、首里市(米軍撮影、県公文書館所蔵))

牛島司令官は第三軍司令部を首里に置き、約五千名の将兵を首里一帯に押し寄せ、同日中に南風原村の津嘉山経理部庫に到着した。その後、摩文仁を目標とする。首里撤退に伴い、戦場に復帰する見込みがないと判断された多数の重症患者は、長男参謀長の命令で自決を強要され、手りゅう弾や青酸カリ入りミルクなどが手渡された。



米統合参謀本部(JCS)は五月二十五日、グアム・マッカーサー元帥、太平洋地域総司令官チェスター・ニミツ提督らに南九州上陸作戦(暗号名コロンブス作戦)を指令した。米統合参謀本部(JCS)は五月二十五日、グアム・マッカーサー元帥、太平洋地域総司令官チェスター・ニミツ提督らに南九州上陸作戦(暗号名コロンブス作戦)を指令した。米統合参謀本部(JCS)は五月二十五日、グアム・マッカーサー元帥、太平洋地域総司令官チェスター・ニミツ提督らに南九州上陸作戦(暗号名コロンブス作戦)を指令した。



シュガーローフヒル (52高地)

日本軍防衛陣地の中核の52高地(シュガーローフヒル、写真右側の丘)を西側の丘から望む。5月12日から18日までの戦闘は、米軍上陸後最大の激戦となり、日米両軍が1日に4回も頂上の攻守が入れ替わった。米第6海兵師団は2662人が戦死(1945年) (米公文書館所蔵)

沖縄戦の実情報告へ

警察別動隊 県が内務省に派遣

警察別動隊の派遣は、米軍上陸以後の戦況や県民の戦意を把握し、日本軍の戦意を伝える電文を送った。県は二十七日にも警察別動隊の派遣について打電した。

「沖縄戦新聞」発刊の狙い

今年、一九四五年の沖縄戦終結から六十周年を迎える。琉球新報社は、沖縄戦六十年を振り返り、戦況を踏まえ、社会に伝えたい。戦況を踏まえ、社会に伝えたい。戦況を踏まえ、社会に伝えたい。

県は二十五日、内務省に對し、激しい砲撃と地上戦を逃れ、防空壕内で避難する県民の窮状を伝える電文を送った。県は二十七日にも警察別動隊の派遣について打電した。

戦況を踏まえ、社会に伝えたい。戦況を踏まえ、社会に伝えたい。戦況を踏まえ、社会に伝えたい。